



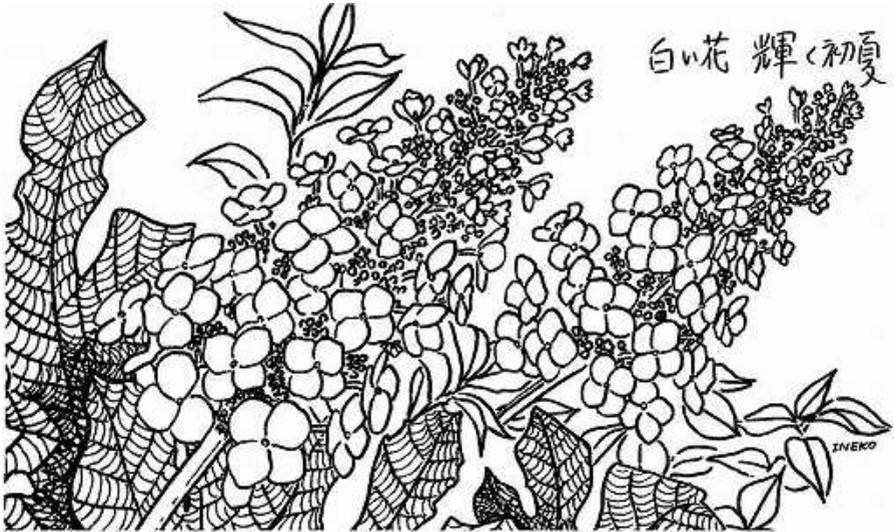
2010年6月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2010年6月
第 80 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（19）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（76）（山内 薫）	6
森の会の音訳サービスに感謝を込めて（岡田健嗣）	9
日盲社協の表彰を受けて（木下和久）	12
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	13
東京漢点字学習会報告（菅野良之）	16
見果てぬ夢を（20・最終回）（山本優子）	21
漢文のページ	25
漢点字講習用テキスト（初級編・第20回）	28
ご報告とご案内	29
編集後記（木下和久）	31

を、「森」は三つの木で、「林」より木の数が多く、密生している様子を表します。「愛」は立ち去ろうとしている人の心が後ろにひかれて、立ち去りかねている様子を、「相」は人が木をじっと見詰めて、樹木から霊力を得ようとしている様子を表しています。

「指事文字」はあれ・これと、指さす形に由来します。「上」は上向きの方角を、「下」は下向きの方角を指示する形です。漢数字の「一・二・三…」の多くも、「指事文字」に分けられます。

漢字はこのように数を増し、表現能力を深めて行きましたが、抽象的な表現を表す「会意文字」は構成要素が増えて、複雑になって行きました。そこですつきりした形の「形声文字」が登場して、漢字の中心を占めるようになりまます。

「形声文字」は、意味を表す部分と音を表す部分からなっていて、それぞれ「意味符号」、「音符号」と呼ばれます。「会意文字」にも見られますが、文字を構成する部分を、その位置によって「偏、旁、冠、脚、繞」などと呼んで、文字の構成を説明できるようになりまします。「偏」はその文字がどのような性格を表すかという、「意味符号」の働きをします。例えば「木偏」なら、樹木の名前や木を材料に作られたものを、「さんずい」なら水に関わる意味の文字を、「人偏」なら人に関わる意味の文字を表します。「旁」はその文字の音を表します。「喚、換」の旁は「カン」という音を表しますし、

「複、復」の旁は「フク」という音を表します。「冠」もその文字の意味を指示します。「ウ冠」は建物の屋根を、「草冠」は草の葉を表します。「脚」と「繞」は、その文字の働きや動きを表します。

しかし「旁」も、音だけを表してはいません。同じ旁を含む文字が、共通の意味を表すということもあります。「喚、換」の旁は、声を出して呼び戻すとか、ものやことがらを取り替えるとかの意味を表していますし、「複、復」の旁は、繰り返して行う、ものごとを重ねて繰り返すという意味を表しています。このような構成によって、「会意文字」に比べて、文字の読みや意味をよりの確に、またより複雑でない形で表す文字と違って、漢字の中心を占めるようになりました。

② 部首と部首索引

ところで私たちが辞書を引くとき、どのようにしているのでしょうか？辞書は、言葉を何らかの分類に従って順序づけて並べられた索引です。英和辞典であれば英語の単語を日本語に当てた場合どういう意味になるかを調べるための辞書です。そこではまず英語の単語をアルファベットのAから始まる単語からZで始まる単語へと並べて、その順序に従って検索できるようなっています。英和辞典では、英単語の発音、品詞、日本語にしたときの意味、使用法や熟語などが調べられます。

国語辞典では、見出し語がかな文字で記載されていて、五十音表、「あ・い・う・え・お、か、さ、た、な、は、ま、や、ら、わ」の順序に並べられていて、それに従って検索できるようになっています。国語辞典では、見出し語をかなで記して、その単語を漢字でどう表すかが示されています。その後語の意味や用例が記載されています。国語辞典の大きな目的は、文字遣いの確認にあります。どういいう漢字が用いられるか、送りがななど、かな文字の使い方はどうかなどを知ることができます。

それでは漢字の辞書はどうなっているでしょうか？漢字は文字と言っても、アルファベットやかな文字のように「音標文字」ではありません。「表意文字」と呼ばれて、意味を表す文字です。言い換えれば漢字は、一つの文字が一つの単語です。従って読みの順序に並べて調べることはできません。そこで音や意味が知られない漢字を調べるには、その並べ方に大変重要な工夫がなされています。

一般に漢和辞典などで行われているのは、「部首索引」による分類と、総画数による順序づけです。

「部首索引」とは、「何、休、信、保」は「人」に、「校、村、枝、来」は「木」に、「詩、討、論、話」は「言」に、「河、池、波、溶」は「水」に所属するというように分類したものです。つまり、人に関する文字は人偏がついているので「人」のグループに、言葉に関する文字

は言偏がついているので「言」のグループに、…というように分類し整理されたもので、この「人、木、言、水」が「部首」と呼ばれます。そして検索は、「人」に関する文字は何ページ辺りに載っているか、「言」に関する文字は何ページ辺りに載っているか、画数は何画かなどと絞り込んでなされます。見出しの文字の後は、音読・訓読、総画数、所属部首名、六書分類、文字の意味・使用法、文字の由来、熟語などが記載されています。

このように「部首索引」は、その文字が所属する部首によって分類されたものを言いますが、「休」は「人」に属していて「木」には属していない、「信」も「人」に属していて「言」には属していないということがあります。もっと極端なこともあって、「韻」は「部首索引」では「音」に属していますが、「音」の文字を含む他の文字では、「意」は「心」に、「暗」は「日」に、「闇」は「門」に属するとなっています。

このように一般に「部首」という言葉は、辞書で検索するときに用いられる「属する文字」の意味、「文字索引」の意味に用いられませんが、本来は、文字の「構成要素」のことです。「休」は「人」と「木」でできている文字、「信」は「人」と「言」でできている文字、「意」は「音」と「心」でできている文字という意味です。

漢字は「象形文字」から始まり、「会意文字」で抽象化し発達し、「指事文字」を加えて「形声文字」に至りまし

た。「部首」の面から見ると、「象形文字」や「指事文字」が「会意文字」や「形声文字」の構成要素ですので、部首と位置づけられます。しかしさらに「会意文字」も「形声文字」も、他の「形声文字」の構成要素となりますので、「部首」に数えられることとなります。

川上先生は、六書の次にこの「部首」に注目されました。この「部首」を点字符号で表せれば、漢字の点字ができるはずです。

③ 漢点字の誕生

点字符号は「 \dots 」の形の六つの点の組み合わせで表されます。点の数はたった六つしかありませんので、どの言語を表す点字も、一つの点の組み合わせに多くの役割を与えています。逆に「一（横線）」のように、視覚的にはどのような使いこなせる記号も、点字では「マイナス、ハイフン、長音、ダッシュ」と、点字符号を変えなければならぬものもあります。

川上先生が最も気遣っておられたのが、この「触読」に対する便宜でした。数少ない点字符号の組み合わせに複数の部首を当てることができるか？数多い漢字を、そのようにして読み分けられるか？そして日本語の標準的な表記法である漢字かな交じり文を表すには漢字とかな文字を区別する必要があるが、触読に適した方法は何か？と、解決しなければならぬ問題が次から次へと出てきました。

第一番目の課題である一つの点字符号に複数の役割を与えるということは、色々な言語で克服しているようだ。やってみなければ分からないが、樂觀的に考えよう。

第二番目の漢字の数に対応するだけの点字符号ができるかということは、点字符号は一マス「 \dots 」の六つの点の組み合わせだ。その組み合わせの数は2の6乗個、64通りだ。これを2マス「 \dots 」を単位とすれば、2の12乗個、4096通りの組み合わせができる。してみると、「当用漢字」（現在では「常用漢字」）は2マスあればできる勘定になります。さらに普段使われない文字は「 \dots 」の3マスで表せば、部首に点字符号を当てるといつても、案外余裕があるかもしれない、このようにお考えになりました。

三番目の、「漢字かな交じり文」の漢字とかな文字をどのように区別し、触読で読み分けできるものにするかという点が、最も難問でした。

そこで川上先生は、大きな決断に踏み切られました。点字の基本的なパターン「 \dots 」の六つの点の上に二つの点を置いて、「 \dots 」の八つの点のパターンを取り入れられたのでした。これによって「 \dots 」はかな文字を、「 \dots 」は漢字を表すことで、漢字かな交じり文の表記に成功されたのでした。蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」という俳句を例に取れば、この中の「菜、花、月、東、日、西」の六文字が漢字、後の「の、や、は、

に、は、に」がかな文字です。漢点字かな交じりの点字で表しますと、



となりませす。このように一マスを八つの点で表すパターンを採用されましたが、これはあくまで漢字とかな文字を区別して、触読しやすくするためでした。

漢点字符号の上に付けた二つの点は、一マス漢点字であれば「」のように、二つともそのマスの上に付けます。二マス漢点字では「」のように、前のマスの左上に一つ、後ろのマスの右上に一つ付けます。三マスの漢点字では「」となりませす。これで前の点から後ろの点までを一つの漢字とみることができるようになって、この二つの点を、「始点・終点」と呼ぶようになりませました。この点によつて漢字とかな文字の区別だけでなく、一マスの漢点字、二マスの漢点字、三マスの漢点字という区別も即時にできるようになりませました。

川上先生は、ルイ・ブライユがアルファベットを点字符号に当てた方法に倣つて、漢字の部首を点字符号に当てられました。それを「基本文字」と呼んで、二つ・三つの部首からなる漢字を、漢点字の「基本文字」を組み合わせることで表されました。

ここではませず、一マスで表される基本文字、「第一基本文字」を「」紹介ませます。

ブライユの点字の一覧を見ると、二つ以上の点の組み合わせは57個です。川上先生は、この57個の点字符号を「第一基本文字」とお決めになつて、一マスで表される漢点字が完成ませました。

石川倉次先生の五十音表に則つて「」紹介ませます。

(続々)

ア行	イ	糸	系	比	数	ウ	家	宿
	学	エ	言	語	オ	頁	貝	
カ行	カ	金	キ	木	ク	草	ケ	犬
	コ							子
サ行	サ	都	シ	市	ス	発	セ	食
	ソ							馬
タ行	タ	田	チ	竹	ツ	土	テ	手
	ト							戸
ナ行	ナ	人	仁	ニ	水	氷	ヌ	力
	ネ	示	ノ	私				
ハ行	ハ	走	ヒ	進	火	フ	女	ヘ
	ホ	方						玉
マ行	マ	石	ミ	耳	ム	車	メ	目
	モ							門
ヤ行	ヤ	病	ユ	行	ヨ	店		
ラ行	ラ	月	肉	リ	分	日	ル	性
	レ	口	囿	口	十	止		心

点字から識字までの距離（七六）

墨田福祉作業所への出張貸出（三）

山内薫（墨田区立あずま図書館）

二〇一〇年二月九日の第二火曜日に、二回目の貸出を行った。一回目の反省からCDの数を大幅に増やし、その他に漫画や絵本、料理の本、若い人向けの雑誌などビジュアル系のものを多めに持って行った。前回リクエストのあった囲碁・将棋の本やクイズの本、旅行関係の本などもいくつか取りそろえた。また前回拡大写本を借りて下さった方のために、『赤毛のアン』の続きの分冊や絵本をB4サイズ横型で描いた拡大写本の『スーホの白い馬』（モンゴル民話、大塚勇三再話、赤羽末吉絵、福音館書店）や『あかいありとくろいあり』（かこさとし作 偕成社）『ロバの旅』（レオ・ポリティ文・絵、ノーラン・クラーク文、石井桃子訳、岩波書店）等を持って行った。

CDについては希望のものを図書館ではあまり所蔵しておらず、仮に所蔵していても人気のCDはリクエストが沢山かかっているために、相当期間待たなくてはならないこと、施設での貸出期間を一月に設定しているため、リクエストの多いものを通常CDの貸出期間である一週間ではなく一月も貸し出しできない等の

理由から、障害者サービス資料用の予算を使って特別に施設貸出用に以下のようなものを購入して持って行った。

「Jアルバム」Kinki Kids' 「ULTIMATE DIAMOND」水樹奈々、「おかあさんといっしょスペシャル50セレクション」、「あの・こんなんできましたケド。」遊助、「ハジマリノウタ」いきものがかり、「EXILE BALAD BEST」EXILE、「All the BEST! 一九九九―二〇〇九」嵐、「WE LOVE」へキサボン、「いままでのA面 B面ですと!」Greeeen、「THIS IS IT」マイケル・ジャクソン、「ICHIKO THE BEST ONE」ICHIKO「愛すべき未来」EXILE

これらのCDは持って行くとすぐに借りられた。リクエストの本以外に借りられた資料は次のようなものだった。

「ゴジラ大全集」 「ゴジラ特撮大全集」 「サンドイツチのおいしいレシピ」 「焼きチョコ&生チョコかんたん・おいしいチョココレートのお菓子」 「新東京さわやか散歩」 「東京都内乗り合いバス・ルート案内」 「サツカ



CDを選ぶ

「上達ブック」「なぞなぞ大王様」「脳ミソ超パニッ
ク最強IQクイズ」

また、拡大写本の「グリム童話集」一分冊から三分
冊も借りられた。

二回目の貸出は、利用者が二九名で、そのうち七名
は今回初めて借りる方だった。第一回の時に借りて下
さったが今回借りなかった方が三名おり、そのうちの
一人はお父さんから借りてきてはいけなと言われた
ので借りられないと話された。残念だが、この方のよ
うに親などに言われて借りられないという方がふれあ
いセンターにもさんさんプラザにも何人かおられる。
なお今回、作業所をお休みするなどで前回借りた資
料を返却できなかった方が八名いらした。

この日借りられたのは、本や雑誌が五五冊、CDが
四五点、その他に拡大写
本が七冊の計一〇七点だ
った。また、新たに券を
作られた方が四名いらし
たので、登録者の総数は
四〇名ということになっ
た。

墨田福祉作業所での二
回の貸出を通して感じた
ことは以下のような点だ



絵本の拡大写本

った。

一月の貸出で拡大写本の『赤毛のアン第一分冊』を
借りた利用者の方に、続きの二〜五分冊をお持ちした
ところ、本を借りて、すぐにばらばらと数頁見て、読
んだから返すと言われてしまった。要は前回借りた拡
大写本も読んでいなかったものと思われた。また、も
う一人積極的にリクエストもし、沢山借りて下さった
方も「ひとつも読めなかった」と言って借りた本を返
して下さった。借りては下さっても、実際に借りた本
を読んでいないという方が結構いるように思われたの
だ。本来、図書館は借りられた資料がどのように利用
されようが、借りた方の自由であり、個人の読書の仕
方、読むか読まないかまで踏み込んで考えることはし
て来なかった。しかし折角、興味を持って資料を借り
て下さったのだから、よりよく利用して頂けたり楽し
んで頂けることまで考えたいと強く思ったのだった。

世界の図書館が集まって構成しているIFLA（通
称IFラ、世界図書館連盟）という組織が発行してい
る『読みやすい図書のためのIFLA指針』（ブロー
ル・I・トロンバツケ編著 日本障害者リハビリテー
ション協会訳、この連載の二二回、「うか」第二五号
で、この指針については取り上げたことがある。http
://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/easy/ifla.
html）では、読書指導員という項目を立ててスウェー
デンの例を紹介している。それによれば、「読書を奨

励し、それによって読みやすい図書の出版機会を増やしていくために、また効果的な情報提供とマーケティングの安定を図るために、スウェーデンの読みやすい図書基金は、文化、社会、教育的プログラムを基本に、地域に密着した読書指導員の組織が必要であると判断した。読書指導員には将来読者になる見込みがある者との接触をはかる義務がある。」とし、そのプロジェクトの結果「本を与えられれば読める知的障害者が、最初考えられていたよりも多かった。更に、その中の多数の者が、それまで認められていた以上の知識をはつきりと示し、また、読書サークルによって異なるテーマへの関心が呼び起こされると、質問や討論へと発展した。本のお陰で、以前は表現することができなかった思考や観念を言葉にすることもできた。ほとんどの参加者にとつて、本は大きな価値をもつものとなった。」と、締めくくっている。スウェーデンでは

国の援助によって、知的障害者や移民など読むことに困難を抱えている人達を対象としたやさしく読める本を年間三〇冊ほど発行し続けている。

図書館員は、このような、いわば読書相談員（指導員という言葉よりもむしろ相談員という言葉の方が適切なように思う）のような役割を持つ必要があるのではないかと考える。それぞれの人の興味関心に沿った、その方にふさわしい図書を探し出して提供した

り、場合によっては読んでさしあげたり、内容を易しく説明したりすることができればと思わずにはいられない。（なお、このIFLA指針は現在改定版を日本障害者リハビリテーション協会で翻訳中とのことである）

そしてもう一点、そうした方々に有効な資料として思い浮かぶのがマルチメディア・デイジー図書である。昨年『赤毛のアン』のマルチメディア・デイジー付き図書が発売された。（村岡花子訳 ポプラ社文庫版）このマルチメディア・デイジー図書であれば、苦勞せずに読んで頂けるのではないかと思つた。しかし、授産施設で働いておられる方々の内、何人の方がパソコンを自由に操作できる環境を持っているのだろうか。多分そうした方はほとんどいないのではないかと思われる。今までの緑図書館での経験から、そうした方々に図書館に来て頂ければ、その場でマルチメディア・デイジー図書を見て頂くことが出来る。そのためには皆さんに気軽に図書館に来て頂くための方策を考える必要があるだろう。



漫画や絵本を増やす

森の会の音訳サービスに感謝を込めて

岡田 健嗣

左は、去る二〇一〇年五月二十七日（木）に、田園調布ボランティアセンターで、岡田がお話をさせていただいた折りに配布していただいたものです。訂正・加筆の上、掲載させていただきます。

私は、1980年代の初頭から、田園調布ボランティアセンターで活動しておられます音訳ボランティア・グループ「森の会」の、音訳サービスで読書して参りました。

私は生まれながらの視覚障害者です。視覚障害者が読書するには、まずは指で触れて読む触読文字である「点字」を身につけなければなりません。幸いにして私は盲学校で点字をしっかりと仕込まれました。

もう一つ、昭和40年代からカセットテープのような安価な録音機器が普及して、誰もが録音できるようなになりました。そこで音訳という新たなサービスが始まり、大きな広がりを見せるようになりました。

視覚障害者である私も、当初は既存の点字図書館から点訳・音訳されている所蔵書を借りて読書しておりました。しかしそのようにしているうちに、いわゆる

乱読から次第に読書の傾向が定まって来ます。そうしますと点字図書館の蔵書では、量的に間に合わなくなつて来ます。そこで「プライベートサービス」と呼ばれるサービスを利用するようになりました。

「プライベートサービス」とは、点字図書館や社会福祉協議会を拠点に活動しているボランティアが、施設を窓口として、個人のニーズへのサービスを行うものを言います。この場合一般には、完成した点訳・音訳書は、蔵書にはなりません。中にはそのようにして製作された点訳・音訳書を、積極的に蔵書にしているところもあります。数少ないのが現状です。

私の読書も、そのようにして作っていた点訳音訳書の割合がどんどん多くなりました。そのうちに、複数の点字図書館や社協のサービスを受けなければならなくなつて、そのようなサービスを探し求めるようになりなりました。こうして森の会の活動に巡り会うことになったのでした。

現在でもそうですが、視覚障害者の周辺では、本格的な文学書や哲学書は、ほとんど作られません。とりわけ文芸誌は、現在「文學界」（文藝春秋社）だけが公式に製作されているだけです。

当時私が、森の会の皆様にプライベートに製作をお願いしましたのは、現在では廃刊になつてしまつた「海燕」（福武書店）という文芸誌でした。「海燕」

は、この3月に逝去された寺田博氏が編集長を務められた大変ユニークな雑誌でした。島田雅彦、小川洋子、千刈あがた、佐伯一麦、吉本ばなな、小林恭二の各氏（千刈さんは残念ながら早世されました）という、現在では綺羅、星の如き作家が世に出た雑誌でした。正に寺田さんの腕前が存分に発揮された雑誌と言われています。

そのような雑誌を私も、ほぼリアルタイムに読むことができたのは、正に森の会の皆様の活動のお陰と申しても過言ではありません。

中でも圧巻だったのは、仏文学者の寺田透さんの著された連載評論「権記」でした。圧巻と申しますのは中身が充実していることばかりではなく、森の会の皆様を大変苦しめた作品だったことでした。

「権記」は、平安時代の官僚・藤原行成の日記です。「広辞苑」を引いてみますと、

《【権記】／ 権大納言藤原行成の日記。九九一年（正暦二）から一〇一一年（寛弘八）に至る。その後には死没の前年二五年（万寿二）まで、わずかに逸文が残る。藤原道長の時代を知る重要史料の一。》

《【藤原行成】／ （名はコウゼイとも） 平安中期の書家。権大納言。その筆跡を権蹟（ごんせき）といい、小野道風・藤原佐理（すけまさ）と共に三蹟と称され、俊賢・公任・斉信と共に四納言と称。後世、

その書法を世尊寺（せそんじ）流という。日記に「権記（ごんき）」がある。書跡と伝えられるものに「白氏詩卷」「本能寺切」など。（972〜1027）》

道長は、

《【藤原道長】／ 平安中期の廷臣。兼家の第五子。御堂（みどう）関白・法成寺入道前関白太政大臣と称されるが、正式には関白でなく内覧の宣旨を得たのみ。法成寺摂政とも。藤原氏極盛時代の氏長者。長女彰子は一条天皇の皇后となつて後一条・後朱雀両天皇を生み、次女妍子は三条天皇の皇后、三女威子は後一条天皇の皇后、四女嬉子は後朱雀東宮の妃。法成寺を造営。自筆本の日記「御堂関白記」が伝わる。（966〜1027）》

とあります。行成は道長より六歳若く、同年に没しているようです。

「権記」は、道長の時代を知るための一級資料であることは、充分過ぎるほど知られているようです。私も後に、放送大学を受講した折りに、重要な資料の一つにこの「権記」が挙げられていることを知りました。

音訳者を困らせたのは、引用されている資料としての「権記」でした。「権記」の記述をどう読み解くかが、この論文の主題だったからです。

わが国の古典資料の例に漏れず、「権記」も、極めて難解な変体漢文で記されていました。ただ読むだけ

ならスーッと読み過ぎてしまってもかまわない引用文も、音訳するとなると、きちんと読み下さなければなりません。朝何時頃牛車に乗って登庁したとか、何時頃誰と会ったとか、記録としては貴重かもしれないが、読みが困難なら読み飛ばしたいと思わせるところがしばしば出て来ます。

私はそのようにして読み下していただいたものを、耳から入れるだけで、ご苦労を想像するのも、恐らく極めて不十分だったに違いありません。今思えば、実に申し訳ないことをしました。

「海燕」は、1997年に廃刊されて、福武書店はベネッセ・コーポレーションと改名して現在に至っています。

「海燕」の廃刊と入れ違いに私は、漢点字の活動に本腰をいれることになりました。現在は横浜と東京のボランティア・グループ「漢点字羽化の会」の運営に関わっています。

森の会とのお付き合いも現在では、「海燕」をお願いしているところに比べると大変薄いものになっていることは否めません。しかし森の会の皆様が製作して下さる「朝日歌壇・俳壇」のテープは、漢点字の読者にとって、漢点字で同書を読むときの、力強い援助者であることは確かです。毎月森の会からテープを受け取り、ダビングし、漢点字版の歌壇・俳壇の読者に送り

ます。私がテープだけで歌壇・俳壇を聞いているところに比べますと、このように行われる読書は、明らかに理解を深めました。と申しますのは、「権記」をテープでお聞かせいただいたことと同様に、音訳者の皆様が短歌や俳句は読み難いとおっしゃっておられたことが、このようにしてや々と分かってくたからです。このことの意味は恐らく、テープでの聴読は読書のプロセスである文字を読み取って解読することを踏まないままに、いきなり言葉が音として入ってしまうために起こったことに違いありません。いきおい音訳のご苦労に不感症になってしまったに違いありません。こうして歌壇・俳壇・漢点字版の読者の皆さんは、そのテープを大変楽しみにしておられるのです。

私たち視覚障害者の読書は、このようにボランティア活動に担われています。ボランティア活動は、60年代、70年代、80年代と活発になって、私たちのニーズに応えようと頑張って下さっています。活動を実践して下さる方々ばかりでなく、その下支えとなる図書館や社協なども、積極的に対応して下さいました。

ところが近年、そのような施設側の対応が徐々に後ろ向きになって来ているように私には見えません。と言いますのは職員の移動の度に、サービスの劣化が見られるからです。私は今、そのような動向に強い関心を持っています。

日盲社協の表彰を受けて

木下 和久



このたび漢点字協会からの推薦により、去る6月3、4日福井市で開催された日盲社協の第58回全国盲人福祉施設大会で、ボランティアとしての表彰を受けることになりました。会場はユアーズホテル フクイです。全国の盲人福祉施設関係者が一堂に会して、「視覚障害者の高齢者対策における制度、情報、暮らしについて協議する」ことを目的として開催されたもので、光道園第二光が丘ハウスが主管施設としてこの大会の運営に当たりました。

全国の盲人福祉施設関係者が一堂に会するというところで、文字どおり北は北海道から南は沖縄県までと、全国から163名もの関係者が参加されました。

初日午後の前半は開会式に次いで研修会ということ、「盲老人の暮らしを豊かにするために」をテーマとしたシンポジウムが行われました。司会は日本点字図書館・館長の岩上義則氏で、シンポジストとして、橋本宗明氏、小笠原拓二氏、山野弥生氏、横山博一氏が壇上に並びました。視覚障害の有無にかかわらず、老後の生活を豊かなものにするためには趣味・健康・娯楽など自己完結的なものだけでなく、いつまでも自己の分に応じて他者に必要とされるような活動をする

ことで充実感を味わうことができ、豊かな老後につながるというような考え方を中心に話し合いが進められました。

午後の後半は交流会ということで、1テーブル8人ぐらいずつのグループに分かれて食事をしながらの交流となりました。席は自由でしたが、私は同じ漢点字協会から推薦されて受賞された加藤京子さんと一緒に、そのお隣には「とちぎ視聴覚障害者情報センター」の佐藤佳美さんと、「視覚障害者総合支援センターちば」の高橋恵子さんが座り、親しくお話をさせていただきました。佐藤さんも高橋さんもご自身視覚障害者ですが、それぞれ遠方からガイドヘルパーなしで参加されていたとお聞きました。後で、帰りの福井駅でこれらガイドヘルパーなしの障害者の方たちに、JR職員がそれぞれ適切に対応しておられたのを見て、なるほどと納得した次第です。佐藤さんは、若い方ですが、漢点字を少し勉強したとのこと、漢点字愛好者が1人でも増えて行くといいのですが、なかなか継続して勉強して行くのは大変のようです。地元素材を生かした料理と上等の地酒をおいしくいただきました。

2日目は講演と受賞ボランティア懇談会が並行で開催され、われわれは懇談会のほうに参加しました。出席された受賞ボランティアは17名でした。出席者の皆

さんそれぞれに自己紹介を兼ねて、抱えている問題点などを話しましたが、どこも同じようにボランティアの定着性が悪いこと、高齢化の問題などを抱えていることが分かりました。ただ、出席者の方は点字図書館や情報センターなど、公的機関の方が多く、ボランティア募集の広報そのものにはあまり苦労がないように、若干うらやましく感じました。参加者の中に82歳でまだ現役の点訳者として活動している方がおられたのは驚きです。この場で漢点字の話をしたとき、初めてそんなものが存在することを知って驚いたという方が何人もおられたのはちよつと残念でもありました。

その後は表彰式典で、出席した受賞者は名前を呼ばれてその場で起立し、感謝状と記念品が代表の方に手渡されました。なお、受賞者の数は、ボランティアが97名、盲人福祉施設の永年勤続職員が31名でした。

せっかく初めて福井の駅に降り立ったので、観光でもするといいいのですが、翌日は欠席できない会合があり、ゆつくりできないのが残念でした。ここから遠くない有名な観光地として、東尋坊があります。そこには3年ばかり前に行ったことがあります。昔の福井の町は知りませんが、JRの駅は立派で駅の周辺に沢山のホテルが建っています。町には路面電車も健在で、活気のある地方都市とお見受けしました。

「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと

木村 多恵子



第53回例会 2010年4月7日(水) 13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

今月から新しいメンバーがお一人加わってくださつた。パソコンにお詳しいとのこと、ご活躍いただけるのが楽しみです。どうぞよろしくお願い致します。

漢点字パソコン入力ボランティア講習会を10月、11月に行うために竹芝小ホールを予約するには、まだヒューマンプラザの規定の期日に、早すぎる。(使用日の2か月前の一日に申し込む)

岡田さんが新しく来てくださった方に、漢点字について説明しているあいだ、漢文を入力しているグループと、啄木を入力しているグループが話し合つて纏めていた。

第54回例会 2010年5月12日(水) 13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

岡田さんの、介護福祉講習会用テキストを急いで手分けして入力することにした。

朝日新聞の毎週土曜日掲載のお花に「花と柳」(詩

人・高橋睦郎)を入力し、漢点字印刷をして、全国の漢点字読者に送って、漢点字を広めることにしたい、と話し合った。印刷は横浜のプリンターを使わせていただきたいので、これは岡田さんから横浜羽化のみなさんに話していただくことにした。

5月27日の田園調布ボランティアセンターでの岡田さんの講演は、「森の会」の皆様が、大変熱心に聞いてくださり、質問も沢山出された。漢点字が必要なこともよくご理解いただけた。最初は自分たちが漢点字そのものを覚えなければ活動に参加できないのではないかと案じておられたが、岡田さんの説明で安心されたようである。中には仮名点字で点訳活動をしてられるような方がおり、かなり熱心に質問しておられた。

東京羽化の皆様、ご協力ありがとうございました。横浜からは木下さんもご参加くださいました。久々に田中さんもご参加くださりうれしいことでした。

会場の近くに森のような所がありそうなので、これは余談ですが、いつか散歩、森林浴をしに行きたいと思っています。

* 予告

6月の例会(第55回)、2010年6月9日

13・30く15・30ヒューマンプラザ7階第1会議室

第39回学習会 2010年6月19日(第3土曜)

18・30く20・30ヒューマンプラザ7階第1会議室

7月の例会(第56回)、2010年7月7日(水)

13・30く15・30ヒューマンプラザ7階第1会議室

第40回学習会、2010年7月17日(第3土曜)

18・30く20・30ヒューマンプラザ7階第1会議室

6月の例会(第57回)、2010年8月11日(水)

13・30く15・30ヒューマンプラザ7階第1会議室

8月の学習会は休会

9月の例会(第58回)、2010年9月8日(水)

13・30く15・30ヒューマンプラザ7階第1会議室

わたくしごと

ゆるし

八木 重吉

神のごとくゆるしたい

ひとが投ぐるにくしみをむねにあなたため

花のようになったらば神のまへにささげたい

これは、ひたむきなキリスト教信者である詩人八木重吉の詩である。

重吉は「許す」ということの難しさをこのように平易な言葉で表現している。

人から投げつけられた憎しみや怒りや、いわれのない悪意をも、相手に投げ返さずに、まずそのまま受け

止める。そうしてひとつひとつ、それらの憎しみなどを、自分に投げつけられる理由がどこにあるのだろうかと考える。自分に非があれば、当然その解決法を探すだろう。けれどもそれが、相手に通じない場合、理解してもらえぬ苦しさで、あるいはなお、深みにはまってしまつて、修復が困難になり、なぜ分かつてくれないのだろうと、かえつて相手を責めたくなくなるかもしれない。

また、どう考えても他人が見てさえ、そのことについて許せないのは無理からぬことだ、と思えるほどのこと、たとえば愛する肉親にたいして危害を加えた相手などを、許すなどとても困難である。むしろ相手への憎しみが膨らむばかりであろう。

そのほか、差別や偏見、さらには戦争まで含め、人間のもつ醜さや愚かさも許し難いこととして、重吉は、これらを石つぶてや氷の塊とし、自分の胸に抱き留め、時間をかけて温め、砕き、溶かし、完全に氷解させ、美しい花束に作り替えて神に捧げたいというのである。

しかし、重吉自身、それがどんなに難しいことであるかをよく知っている。花にまで作り替えるなど到底無理なのだ。この花とは「やつと許し終わつたもの」ではなく、もっと澄み切つたものでなければならぬ。なぜなら、「許す」という行為の前提には、最

初、怒りがともなっているからである。その怒りをさえ発生しないように感情を抑制したりするのでなく、怒りそのものが最初からなかったかのような純粹さ、言うなれば無の境地にまで高めたもののだ。

重吉は最初から、「これは至難の技だ」と言っている。「神のごとく許す」なんて、人間にはできるはずもない。だからこそ祈るしかないのだ。忍耐する意志、希望、「許したい」、「ゆるせる心を与えてください」と、その〈完成〉を切望し、憧れ、成就したいと願うのだ。

そこまで純化させ昇華させられないとしても、その何百分の一なりとも、神の前にひれ伏してこの花を捧げたいという。

キリストが、すべての人の罪を取り除き、それらの罪を許すために、十字架に架かつて死なれたように、重吉も少しでもキリストに倣つて、この困難な道を進んで行きたいと祈るのである。

八木重吉は、明治31（1898）年2月9日、現在の町田市（当時の東京府南多摩群塚村）に生まれた。病弱ではあるが、冒頭で述べたように、キリスト教の深い信仰をもっていた。そして、教師をしながら、驚くほど沢山の詩を書き、詩人として次第に世に知られるようになってきた。

ここに挙げた「ゆるし」は、大正14（1925）年

10月8日の詩稿、『しずかな朝』の40編の中の1編である。「八木重吉全集」第二巻、昭和57（1982）年10月26日所収、筑摩書房」

詩集『貧しき信徒』〔佐古純一郎選、昭和33（1958）年12月、新教出版〕は、人々に広く読まれた。

「ゆるし」はここに納められていた。わたしは八木重吉イコール『貧しき信徒』として記憶している。

重吉は、富子と熱烈な恋愛をし、たった4年一緒に暮らした後、29歳という若さで病死した。昭和2（1927）年10月26日のことである。

重吉は、新しい詩ができる、「おおい！とみこー！」と叫んで、「おれが呼んだらすぐに来い、一番最初に聞かせたいのだから」と言っていたという。富子は重吉の死後、歌人・吉野秀雄と再婚しているが、重吉のすべての詩稿を大切に守り、富子宛の手紙も含めて、戦争中も持ち歩いて今日に残している。

わたしがこの詩に強く惹かれるのは、わたし自身の中に、様々な欠点があり、自分でも許し難いと思うものを沢山見出すからである。これは罪のひとつである。この罪を、わたしなりになんとか消し去りたいと必死に願う。けれどもこの願いは途方もなく難しいことが、日々の生活の中でよく分かる。重吉が命をかけて、清らかな花を神の前にささげようと努力したように、わたしもそんなまねごとを、できることならしてみたい。

この詩に出会って、わたしの心に強く響くのは、わたしの傷みをも、重吉が背負ってくれているように思われるからである。

重吉は、なぜこれほど複雑なことを、限りなく優しい言葉で言い表すことができるのだろう。重吉はほんとうに純粹で、豊かな、しかし激しい情感を持った詩人だったのだと想像する。

わたしは、この「ゆるし」という詩に作曲されたものを聞いている。その他、この作曲家以外にも何人かが、重吉の詩に引きつけられてこの詩以外のものに作曲していることも知っている。

今後、人々の魂を揺り動かす詩として、八木重吉が残した詩の数々は永く読み継がれてゆくだろう。

2010年6月3日 木曜

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成21年度 第12回（第36回）報告

1 日時 平成22年3月20日（土）

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）

4 使用教材 「漢点字講習用テキスト 初級編

第四回 (全十回) 一 点字編、墨字編

5 学習会内容

前回の復習 4 基本文字 (3)

対あるいはグループをなす比較文字 (2)

* 重さの単位を表わす比較文字

(31) 「貫^{●●●●}」比(4・5の点)とツ(1・3・4・5の点)で表わす。 「慣」などパーツとして用いられる。

(32) 「匆^{●●●●}」比と又(1・3・4の点)で表わす。

(33) 「斤^{●●●●}」比とオ下がり(3・5の点)で表わす。おのづくりとして、斧、斬、断、斯、新などパーツとして多く含まれる。

(34) 「屯^{●●●●}」比とフ(1・3・4・6の点)で表わす。噸、頓、沌などパーツとして使われる。

* 容積の単位を表わす比較文字

(35) 「升^{●●●●}」比とク(1・4・6の点)で表わす。

(36) 「斗^{●●●●}」比とト(2・3・4・5の点)で表わす。パーツとして、科、料、斜、などに用いられている。

(37) 「勺^{●●●●}」比とモ(2・3・4・5・6の点)で表わす。つつみがまえとして、約・蒟(やく)、酌・杓・灼(しゃく)、的などに用いられている。

近似文字

「斤」 「斤」の近似文字。ア(1の点)とオ下が

り(3・5の点)で表わす。

「丘」 「升」の近似文字。ク(1・4・6の点)と4の点とで表わす。

今回の学習

比較文字に類似した文字

* 乗と垂 下の部分が「木」「土」

(1) 「乗^{●●●●}」ノ(2・3・4の点)とき(1・2・6の点)で表わす。音読みのジョウは呉音。熟語に「騎乗」「自乗」「相乗(効果)」「大乘仏教」「添乗員」「馬乗り」「悪乗り」「飛び乗る」「乗り越し」「乗り心地」「乗鞍」「乗り熟す(こなす)」などがある。

(2) 「垂^{●●●●}」2・5の点とニ(1・2・3の点)で表わす。音読みのスイは漢・呉音。熟語に「垂涎(すいえん・すいせん)」「項垂れる(うなだれる)」「垂れ込み」「胡麻垂れ」「前垂れ」「直垂(ひたたれ・礼服の一種)」「他の読み方で「岩垂氷(いわつらら・鍾乳石の異称)」「垂り尾(しだりお・長く垂れた尾)」「雪垂(ゆきしずり・雪が木の枝などから落ちること)」「などがある。

* 浮と沈

(3) 「浮^{●●●●}」4・5・6の点とウ(1・4の点)で表わす。音読みのフは漢音。水に落ちた子どもを助けている形からきている。熟語に「浮草(うきぐ

さ) “浮世絵” “浮き彫り” “浮遊(ふゆう)”

“浮気” “浮き足” “浮浪(ふろう)” “他の読み方に
“浮腫み(むくみ)” がある。

(4) 「沈^{⋮⋮⋮}」 4・5・6の点と3・6の点で表
わす。水から下に沈んでいるかたちからきている。音
読みのチンは漢音、ジンは呉音。熟語に “浮沈” “消
沈” “沈下” “沈静” “沈痛” “沈丁花(じんちやう
げ)” “沈菜(キムチ)” などがある。

5 複合文字 (2)

1. 第1基本文字と比較文字で

構成される文字(1)

* 「中」比(4・5)とウ下がり(2・5の点)を
パーツとして含む文字3つ。

(1) 「仲^{⋮⋮⋮}」人偏(ナ・1・3の点)と中(ウ下
がり2・5の点)で表わす。音読みのチュウは漢音。
熟語に “仲裁” “恋仲(こいなか)” “仲良し” “仲違
い(なかがい)” “仲立ち” “仲店” “仲見世” “杜
仲茶” “仲買人” 一字で “仲(すあい、売買の仲買を
すること)” “人名に “木曾義仲” などがある。

(2) 「沖^{⋮⋮⋮}」さんずい(ニ・1・2・3の点)と
中(ウ下がり・2・5の点)で表わす。音読みのチュウ
は、漢・呉音。熟語に “沖合い” “沖中仕(おきな
か)・はしけと本船の間で荷役をする人)” “沖の尉
(じょう)、沖の大夫(たゆう)・いづれもアホウドリの

異称” “沖積(ちゆうせき)・流水で土砂などが積み重
なること)” “沖る(ひひる)・ひらめき飛び上
る)” “島に “沖永良部島(おきのえらぶしま)” 江戸時
代の国学者に “契沖(けいちゆう)” などがある。

(3) 「忠^{⋮⋮⋮}」中(ウ下がり・2・5の点)と心
(ル下がり・2・5・6の点)で表わす。音読みのチュ
ウは漢・呉音。訓読みに “まごころ”。名前に “た
だ、ただし、あつし、きよし” の読みがある。熟語に
“忠実(ちゆうじつ、まめ)” “忠告” “忠心” “隠
忠(おんちゆう)・内通、うらぎり)” “至忠”、まめ
には “口忠実” “筆忠実”、人名に多く使われ江戸時
代の地理学者・測量家て我が国最初の実測地図「大日
本沿海輿地全図」を作成した “伊能忠敬(いのうただ
たか)” や侠客の “国定忠治(くにさだちゆうじ)” “
などがある。

* 「右」(比・4・5と5・6)をパーツとして含
む文字。

(4) 「若^{⋮⋮⋮}」草冠(ク・1・4・5の点)と5
・6の点で表わす。右の部分は手でサイを持って踊っ
ている様を示す。音読みのジャクは漢音、ニヤク・ニ
ヤは呉音。熟語に “泰然自若(たいぜんじやく)” “
“傍若無人(ぼうじやくぶじん)” “若鮎” “若氣”
“若草” “若人(わこうど)” “若布(わかめ)” “
“若族(にやくぞく)・若衆)” “若返り”、地名に

「会津若松」「若狭湾」他の読み方に「杜若（かきつばた）」がある。

平成22年度 第1回（第37回）報告

1 日時 平成22年4月17日（土）18時30分～20時30分
2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）
4 使用教材

漢点字講習用 テキスト 初級編

第四回（全十回） 点字編、墨字編

5 レーズライター…因、恩、央、英、関、送、規、賛
学習会内容

前回の復習

4 基本文字（3）

対あるいはグループをなす比較文字（2）

比較文字に類似した文字…墨字の字形に共通部分があるなどの文字。

* 「乗」と「垂」…下の部分が「木」と「土」

（1）「乗」ノ（2・3・4の点）と木（キ）
1・2・6の点）で表わす。

（2）「垂」2・5の点とニ（1・2・3の点）で表わす。

* 「浮」と「沈」…文字の意味と、漢点字の符号か

らグループとした。

（3）「浮」第2さんずい（4・5・6の点）とウ（1・4の点）で表わす。

（4）「沈」第2さんずいと（3・6の点）で表わす。

5 複合文字（2）

1. 第1基本文字と比較文字で

構成される文字（1）

* 「中」比（4・5の点）と2・5の点をパーツとして含む文字3つ。

（1）「仲」人偏（ナ…1・3の点）と中（2・5の点）で表わす。

（2）「沖」さんずい（1・2・3の点）と中（2・5の点）で表わす。

（3）「忠」中（2・5の点）と心（ル下がり）2・5・6の点）で表わす。

* 「右」（比…4・5の点と5・6の点）をパーツとして含む文字。

（4）「若」草冠（ク…1・4・5の点）と5・6の点で表わす。

今回の学習

* 「左」比（4・5の点）とイ下がり（2・3の点）をパーツとして含む文字1つ。

(5) 「**佐**」第2人偏(4・6の点)とイ下がり(2・3の点)で表わす。字式は人偏十左。音読みのは、漢・呉音。熟語に軍隊の「大佐、中佐、少佐」や自衛隊の「1佐、2佐」の位に用いられるほかは、人名、地名に多く見られる。「佐久間」「佐野」「佐分利」、「佐久」「佐倉」「佐世保」「土佐」「佐賀」「宇佐」「伊勢佐木町」など。

* 「大」比(4・5の点)とケ(1・2・4・6の点)をパーツとして含む文字6つ。

(6) 「**器**」大(ケ・1・2・4・6の点)と口(レ・1・2・4・5の点)で表わす。字式は(口十口)／大(口十口)。音読みのは漢・呉音。熟語に「楽器」「陶器」「嘘発見器」「火気」

「花器」「土器(どき、かわらけ)」「受話器」「送話器」「大器」「什器」「武器」、歴代の天皇が受け継いできた「三種の神器(さんしゅの、じんぎ)鏡、剣、曲玉」などがたま「など多数ある。

(7) 「**春**」大(ケ・1・2・4・6の点)と日(リ下がり)・2・3・6の点)で表わす。字式は三(バックスラッシュ)人(日)。三と人が重なった場合漢点字では「大」で表わす。音読みのは漢・呉音。熟語に「思春期」「迎春」「頌春」「春雨」「陽春」「早春」「立春」「春告げ鳥(ウグイス)」「春

告げ魚(にしん)」「春の七草(せり、なずな、ごぎょう、はこべ、ほとけのぎ、すずな、すずしろ)」「小春日和」「春菊」「春巻」、地名に「春日部」「三春」などがある。

・ 「因」とそれをパーツとして含む文字1つ。

(8) 「**因**」国構え(レ下がり)・2・3・4・6の点)と大(ケ・1・2・4・6の点)で表わす。字式は国V大。音読みのは漢・呉音。訓読みには「よすが」。熟語に「一因」「因子」「因習」「因数」「外因」「勝因」「敗因」「起因」「囲碁の位に」「本因坊」、地名に「因幡(いなば)」「因島(いんのしま)」などがある。

(9) 「**恩**」因(ケ・1・2・4・6の点)と心(ル下がり)・2・5・6の点)で表わす。字式は因/心。音読みのは漢・呉音。熟語に「恩返し」「恩赦」「恩讐」「恩愛」「二恩(父母の恩、師と親の恩)」「周恩来(中国の元首相)」

(10) 「**央**」大(ケ・1・2・4・6の点)とオ(2・4の点)で表わす。音読みのは漢・呉音。熟語に「月央(1ヶ月のなかば)」「年央(1年の中頃)」「震央(地震の震源の真上の地点)」「中央線」「中央区」などがある。

見果てぬ夢を（二十・最終回）

発刊によせて

兵庫県立盲学校同窓会

会長 増田 守男



幕末二十八代薩摩藩主島津斉彬は、西洋文明を入手するために、欧米の各種文献の翻訳出版を手がけ、薩摩の藩士を大いに教育した。そんな土地で、左近允孝之進は生まれ育った。

孝之進の幼少のころ、西南戦争で父尚一は官軍側で戦死し、父のいとこは薩摩藩側で戦死した。親戚どうしが立場の違いで戦わねばならない環境を乗り越え、孝之進は成長していった。

少年期、明治十五年二月に創刊された鹿児島新聞の印刷光景を食い入るように見て脳裏に刻みつけた。その時、鹿児島新聞の初代社長野村政明に出会った。

野村は、孝之進が通っていた共立学舎の創設者で、鹿児島島の士族の家計は苦しかったので、経費も浄財で賄い、無償に近い教育を実施した。

孝之進が東京専門学校（現早稲田大学）で学んだころは、頑丈な体格であった。しかし、その後、日清戦

争に従軍して、身体を酷使したために、目を患い、それが失明の原因となったのである。

福岡の地で、伴侶となる今村増江さんと出会ったことも、孝之進の志を全うするため、天が与えたもうたものであった。孝之進の志を自らのものと受け止めた彼女を得て、孝之進は大きな勇気を持ったに違いない。

野村政明の心は孝之進の中に生きていた。自らの失明から、失明の子供達のために捧げようと、点字活版機の発明と印刷事業へ駆り立てられたのである。点字新聞「あけぼの」と、早稲田中学の講義録の出版は目の不自由な人々に自ら学び、自ら知る機会を与えた。私立神戸訓盲院は、明治三十八年六月十日に創設された。

「治療家である前に、教養人であらねばならぬ」と、普通教育を重点に置くユニークな学校が誕生したのである。

視覚障害者で英国に留学した好本督は、東京で若い視覚障害者に、信仰と学問を奨励し、後に、日本の「視覚障害者福祉の父」と言われた。また、岐阜訓盲院の創立者、森卷耳も孝之進の訓盲院に寄せる気持ち奮い立たせたことであろう。

好本督や森卷耳のクリスチャンとして立派にやって

いる姿は、孝之進やあとに続く視覚障害者クリスマスチャンを励ましたのである。

訓盲院は経済的に逼迫していた。豆腐屋があまりの貧乏に鈴をおさえて、さけて通り過ぎるほどであった。

明治四十二年三月、訓盲院第一回卒業式の時、孝之進は病の床にあり、なけなしの金をはたいて、三人の卒業生を祝ったのである。

「見はてぬ夢を」は、何だったのであろう。普通の人と同じように、机を並べて仕事につけることなのか。それとも教養人としてリーダーにたっていることであろうか。いずれにしても、三十九歳は、残念と言わざるをえない。しかし、百年たった今も（わたしたちは）「見はてぬ夢を」を追っている。

信仰していたイエス・キリストは活躍中の三十三歳で召天したと言われる。左近允先生は、神戸に住んで十年余、三十九歳という若さで亡くなられた。ちょうど百周年のこの年に、左近允先生の伝記の発刊を考えていたところ、しかるべき執筆者が与えられた。

この本が、活字と点字で出版され、多くの人に読んでもらい、明日への希望となってくれることを堅く信じて発刊の言葉と致します。

「先人の 見果てぬ夢を 追い求め
何時か手にせん 希望の花を」

二〇〇五年 初夏

あとがき

左近允孝之進という人の伝記を書かないかとの話をいただいたのは、二年ほど前でした。郵送されてきた「福祉の灯」という冊子を開いて（この苗字は何と読むんやろ……）と、思ったものでした。目を通しながら、福祉事情がよくなかった明治時代に自らの命を削ってこんな働きをした人がいたのかと、心震えましました。が、資料がほとんど手に入らないとのこと、これでは正確な伝記など書けるはずがないと思いました。

三浦綾子さんの『塩狩峠』という小説があります。

左近允さんが生きたのとほぼ同時代、鉄道職員であったN青年が連結器から外れて峠を下りはじめた列車を止めるために線路に飛び降り、乗客たちの命を救ったという事件をもとに書かれました。三浦さんは、Nさんの話を聞いた時「激しい感動」を受け、小説に書きたいとひらめいたそうです。ところが、生前のNさんに関する資料はほとんど残っていませんでした。三浦さんは、「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つに

て在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」という聖書のことをばを主軸に、Nさんの時代、背景、心の変遷などを想像し、作品世界を造り上げました。小説で描かれたNさんというのは、実在したNさんとはかなり違っていることでしょうか。が、何のために生きるかという人生の根幹をつかんでいたNさんの姿勢は、小説で表現され尽くしていると思います。その生き方は人生の目的を求めて彷徨せずにはいられない人の心に衝撃を与えます。その衝撃の出所は、人生を本来あるべきものに導くものではないかといった感覚を呼び覚ますこともありませう。そのためにこの小説は世に出て以来長年に渡って多くの人に読まれ続けているのではないかと思えます。

「福祉の灯」ほかの資料に目を通しながら、私はこの『塩狩峠』のことを考えました。そのうちに、イメージが湧いてきました。増江夫人と腕を組んで、動き回っている左近允青年の姿です。彼は、もつともつと長く生きて、働きを進めたかったはずで、仮に後十年でも生きながらえていたとしたら、私たちの想像が及ばないほどの目に見える業績をあげたのではないでしようか。時代の開拓者としての溢れる資質を持ち、貧しさや周囲の無理解といった困難にめげず、次々に夢の実現のために取り組んでいった左近允さん、よう

やく成果が見え始めた時病床に追いやられ、この世を去らなくてはならなかった現実の中でどれほど悔しく苦しい想いを抱いたことでしょうか。それでも、左近允さんは自らの使命に献身する日々を最期まで送ったようです。志は増江さんと後の人たちにバトンタッチされました。

その夢を受け継いできた現在の兵庫県立盲学校には、当時左近允さんたちが想い描いていたのとは違うものがあるかもしれません。が、この盲学校だけでなく、現在の日本の盲教育は左近允さんの夢を土台に新しい時代に貢献しているとさえ言えます。

それほどの働きを遺したにも関わらず、現時点では、左近允さんについて正確にわかることは限られています。それなら、この左近允さんが見つめていたものを軸に、小説として書いてみたいと私は願いました。これによつて、左近允さんのことを掘り起こしてみようという人たちが現れ、その働きがより正確に後世に伝えられていくきっかけになれば、というのが、この小説のねらいです。ですから、作中の左近允さんはじめ、登場者の人物像は実際とは少なからず違わずなのをご承知の上でお読みいただければと思います。そして、お叱りや間違いのご指摘を含めて、左近允さんに関する情報提供をいただければ、心より嬉し

く思います。

このように拙い作品ですが、出来上がるまでには実に多くの方々のお世話になりました。その方々はまた、この殺伐とした時代に、黙々と世の一隅を照らしておられるのを知りました。

増江さんの実家を現在守っておられる今村辰之助氏ご一家からは、貴重な写真、資料、情報提供をいただいた上、増江さんが使っていたに違いない久留米市草野の方言のご指導をいただきました。西郷南洲顕彰館館長の高・毅氏、鹿児島県立図書館職員の北之園千春氏、鹿児島県立視聴覚障害者情報センター職員の良い（らく）万里子氏、鹿児島方言研究者であられ鹿児島弁のご指導をくださった上村（かんむら）忠昌氏をはじめとする当地の方々の多大なご協力がありました。

また、左近允夫妻とご母堂千代さんが洗礼を受け会員であった現在の日本基督教団神戸多聞教会前牧師の北里秀郎氏には大切に保管されていた明治時代の教会資料や写真もご提供いただきました。同牧師を紹介してくださったのは県立盲学校同窓会理事、近藤敏郎氏です。県立盲学校教諭を退職された松本昌三氏、現職教諭の井上義治氏、藤原和賀奈氏、二〇〇五年三月県立盲学校を卒業され、現在大学生の馬場宏祐氏、森松昌志氏、筑波大学理療科教員養成施設学生光上信幸

氏、淡路盲学校講師春名尚信氏には、お話をうかがい、そのご体験などを参考にさせていただきました。また、関西盲人宣教会の根本浩氏ほかにも、失明者の立場から助言をいただきました。さらに、県立盲学校国語科担当の川上裕子氏、大谷美和子氏をはじめとする創作グループ「ふらここ」同人の皆さんには、主に文章的な点で指摘をしていただきました。

資料の収集に関しても鹿児島県立図書館、鹿児島市と久留米市役所観光課、筑波大学付属盲学校図書館、早稲田大学大学史資料センターほかの方々にお世話になりました。

最後になりましたが、この小説執筆を任せてくださり、私に代わり数回にわたって九州へ、東京へと取材に訪れ、これまで知られていなかった事実を見つけてきてくださったのは、県立盲学校教諭の古賀副武氏、安富義哲氏です。そして、誠意に満ちた編集をしてくださいましたのは、燦葉出版社社長の白井隆之氏です。この方々の助けが一つでも欠ければ、この作品は違ったものになっていました。

至らない仕事を恥じつつ、ご協力くださった皆さまに言い尽くせない感謝を申し上げるばかりです。

二〇〇五年四月

山本優子

桃源郷 (三)

中、外人、其処、太守、即向、得路。
 停数日、辞去。此、
 人語云、「不、
 人、道也。既、出、
 船、便、扶、向、
 志、之、及、郡、
 守、説、如、此、
 遣、人、随、其、
 所、誌、遂、迷、
 路、。

〔陶淵明集〕

参照図書

奥平

卓『漢文の読みかた』
(岩波ジュニア新書)

停まること数日にして辞去す。此の中
 の人語りて云う、「外人の為に道うに足
 らざるなり」。既に出でて其の船を得、
 便ち向の路に扶い、処処に之を誌す。郡
 下に及び、太守に詣りて、説くこと此く
 のごとし。太守即ち人をして其の往くに
 随いて、向に誌せし所を尋ねしむるも、
 遂に迷いて復路を得ず。

村人たちのもてなしをうけた漁師は、帰る際に
 「このことは外部の人に話すほどのことではあ
 りませんよ」と婉曲に禁止されるが、ところどこ
 ろに目印をつけながらも来た道をもどり、郡の
 長官にこのことを話す。長官はすぐに人をやり、
 漁師の後について目印をたどらせたが、道に迷い、
 村への道を探し当てることはできなかつた。

使役動詞 使・令・遣・教

いずれも同様の形で使われる。…ヲシテ
 …シムと読み、…に…させるの意。

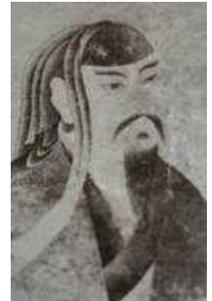
遣ム 人ヲシテ 尋ネ
 (人をして尋ねしむ)

桃 源 郷 (三)

停 マルコト 数日 ニシテ 辞 去 ス 。 此 ノ
中 ノ 人語 リテ 云 フ 、 「 不 ル 足
ラ 為 ニ 外 人 ノ 道 フニ 也 」 。
既 ニ 出 デテ 得 其 ノ 船 ヲ 、 便
チ 扶 ヒ 向 ノ 路 ニ 、 処 処 ニ
誌 ス 之 ヲ 。 及 ビ 郡 下 ニ 、
詣 リテ 太 守 ニ 、 説 クコト 如 シ
此 クノ 。 太 守 即 チ 遣 ムルモ 人 ラシ
テ 随 ヒテ 其 ノ 往 クニ 、 尋 ネ
向 ニ 所 ヲ 誌 セシ 、 遂 ニ 迷 ヒ
テ 不 復 得 路 ヲ 。

陶淵明 (3 6 5 年 ~ 4 2 7 年)

下級官吏の職を嫌い、郷里の田園に隠遁する。
「帰去来の辞」「飲酒二十首」など詩・散文を
併せて130余首の作品が残されている。
「桃花源記」は、ユートピアとしての桃源郷の
語源となった作品として名高い。





漢点字講習用テキスト

初級編 第二十回

4 基本文字（3）… 比較文字

本章では、三つ目の〈基本文字〉をご紹介します。

〈基本文字〉とは、“偏”とか“旁”とか、他の文字の部首（パーツ）となる、最も小さい単位の文字を言います。これまでに〈漢数字〉と、一マスで表す〈第一基本文字〉をご紹介します。

今回は、〈比較文字〉と呼ばれる文字です。

第一基本文字に“比比”という漢点字がありました。これは、「ヒ、くらべる」と読みますが、漢数字の漢数符「𠄎」と同様に、一マス目に〈比〉の点字符号「𠄎」（45の点）が置かれる文字です。この漢点字は、二マス目に来る点字符号が部首となって、他の多くの文字を構成します。

この〈比較文字〉は、川上先生の発案になるものです。先生のお考えの〈基本文字〉が、如何に整理され分類されたものか、この〈比較文字〉から、最も斬新的な形で示されていることをご理解いただけるものと思います。

この〈比較文字〉は二つに大別されます。

①意味の上で、小さなグループを作る文字—「上と下」「右と左」「父と母」のように、意味的に、対、あるいはグループをなす文字です。

②長さ・重さ・容積などの単位—ここではいわゆる“尺貫法”の単位を表す文字です。既に「分、合」が出て来ていますが、多くはこの〈比較文字〉に含まれる文字で表されます。

1. 対、あるいはグループをなす比較文字（1）

※「父」と「母」

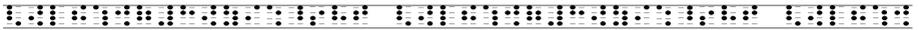
(1) 父 𠄎𠄎 フ ちち

手で斧を持って、振り下ろす形を象った文字です。漢数字の八の下に左右に交差した斜めの線で表されます。古くは、年長の男性の呼称でしたが、現在では、父親の意味に用いられます。漢点字では、「父」で表されます。

「父母」「父兄会」「父性」「父祖」「父系家族」「祖父」「神父」「父親」「父方」

(2) 母 𠄎𠄎 ボ モ はは

「女」の文字に、点を二つ加えた形、乳首のある女性を象った文字です。赤ちゃんに授乳する女性、子を産み育てる女性、つまり母親を意味する文



字です。“母国、母校”と、出身を表す意味にも用いられます。漢点字では、「母」で表されます。

「母子」「母国」「母校」「母港」「母船」「父母」「祖母」「酵母」「母系家族」「航空母艦」「母親」「母方」

※「上、中、下」

(3) 上  ジョウ ショウ うえ うわ かみ あ - がる
あ - げる のぼ - る のぼ - せる

下から上を指し示す形の文字です。このような文字を〈指事文字〉と呼びます。上の方、上にいる人、上の方を目指して進むという意味があります。漢点字では、「上」で表されます。

「上方」「上昇」「上下」「上流」「上品」「上訴」「計上」「机上」「上方」「上がり框」「立ち上がる」「上り列車」「売り上げ」

(4) 中  チュウ なか うち あた - る

横長の「口」の真ん中を、縦線が交差した形の文字です。四角い板を貫いた形を象っています。“なか”と読んで、ものの内側、ある範囲の中央、ものの中程、真ん中に来る、また仕事や動きが進行している最中、日の出ている間、すなわち昼間を意味します。“あたる”と読んで、ものの要点を貫く意味、的にあたる(的中)、毒にあたる(中毒)、病気にかかる(中風、卒中)などと用いられます。漢点字では、「中」で表されます。

「中国」「中央」「中心」「中学校」「中年」「中立」「中庸」「最中」「休憩中」「日中」「中天」「南中」「的中」「命中」「食中毒」「中風」「卒中」「真ん中」「中身」「中程」「最中」

(5) 下  カ ゲ した しも もとさ - がる さ - げる
お - りる お - ろす くだ - る くだ - す くだ - さる ひく - い

「上」を逆さにした形の文字です。上から下を指し示すという意味を表します。「した、しも」と読んで下の方にあるもの、上に対して下に位置するもの、流れの先の方の意味を表します。「もと」と読んで、ものの下の部分、足下の意味を表します。「さがる、さげる」と読んで、役所を求めて民間に身を置いたり、ものを上から下へ移したりすることを表します。「おりる、おろす」と読んで、高いところ、あるいは乗り物からおりる、ものをおろす、「くだる、くだす」と読んで、高いところから低いところへ移動する、あるいは上から下へものを言う、品物を与えるなどの意味を表します。慣用的に「ください、くださる」と、謙譲的にも用いられています。漢点字では、「下」で表されます。

「下方」「下流」「下校」「下車」「上下水道」「下司」「上り下り」「下り列車」「川下り」

「報告とご案内」

一 賛助会員への御礼

昨年度・二〇〇九年度に賛助会費をご納入いただきました皆様、謹んで御礼申し上げます。有用に使用させていただきます。

以下、ご芳名を以て、御礼とさせていただきます。

川上リツエ様、村田忠禧様、雨宮絢子様
河村美智子様、武田幸太郎様、飯田みさ様
佐川隆正様、松村敏弘様、政井宗夫様

二 日本盲人社会福祉施設協議会の表彰

本会の木下和久さんが、日本漢点字協会のご推薦で、六月三・四日に福井市で開催された日盲社協の全国大会で表彰を受けられました。

大変おめでとうございます。

木下さんは、一九九六年に発足した本会の中心として、弛まずご尽力下さっております。漢点字の普及にも、大きな力になって下さっております。

普段は御礼も申し上げられませんが、この度の表彰は、本会の活動への評価として、会員一同、ご支援下さっている皆様、読者の皆様とともにお祝い申し上げます。



たいと存じます。

木下さんは一文を、本誌に寄せられました。ご精読下さい。

三 田園調布ボランティアセンターで

去る五月二七日(木)に、田園調布ボランティアセンター(東京都・大田区)で、岡田が、漢点字のお話をさせて頂きました。岡田は長年、同センターで活動しております音訳ボランティア・グループ「森の会」の皆様の、音訳のサービスを受けて参りました。そのご縁でお話をさせて頂いたたく運びとなりました。

その折りのレジュメとして書きました拙文を、一部補筆して、本誌に転載させて頂きました。ご笑覧下さい。



木下さんへの感謝状

四 会員募集

横浜及び東京漢点字羽化の会では、会員を常時募集しております。活動をご希望の方は、お申し出下さい。

これまでにほぼ五年に一度の割合で、会員を募集する講習会を開催致しました。今年はその年に当たっていません。

① 横浜で

横浜漢点字羽化の会では、以下の要領で、会員募集のための講習会を開催致します。

日程… 9 / 29 (水)、13 / 30 / 15 / 30

10 / 06 (水)、12 / 30 / 14 / 30

10 / 20 (水)、13 / 30 / 15 / 30

会場… かながわ県民活動サポートセンター

会議室 304 (横浜駅北口・西口方面)

徒歩5分)

募集… 応募方法… 往復はがき

締め切り 9 / 11 (土) 必着。

宛先…

〒245・0013 横浜市泉区中田東4・8・8

木下和久

受講料… 1000円 (資料代)

問い合わせ… 電話 03・3613・3160 (岡田)

② 東京で

東京漢点字羽化の会でも同様に会員を募集いたします。現在日程と会場を検討しております。おおよそ以下のような予定です。

日程… 11 / 10、11 / 17、11 / 24 (水)

13 / 30 / 15 / 30

会場… 港区ヒューマンプラザ

(JR・浜松町駅下車)

7月には確定する予定です。

以上、多くの方のご参加をお待ち申し上げます。

五 杉山検校生誕四〇〇年記念CD

今年、管絃術の祖・杉山和一の生誕四〇〇年になります。

去る五月三〇日に、「杉山検校遺徳顕彰会」主催の記念式典が開催されました。

本会にも日本漢点字協会から、記念のCD、『講談「和一」宝井馬琴、琵琶「杉山検校」錦心流・榎本芝水』が届いております。お聞きになられます方は、お申し出下さい。

編集後記

▼図らずも漢点字協会の川上リツエさんのご推薦で、日盲社協から表彰を受けることになりました。その大会会場は福井だということで、わざわざそこまで出かけなくてもという気がしましたが、福井という土地が珍しいので、旅行がてら出かけてみようという気になったのです。三木市で漢点字ボランティアとして活動していらつしやる加藤京子さんもおいでになり、一緒に受賞しました。他に知人もおらず、彼女と親しくお話をさせていただきました。やはり、あちらのほうでもボランティアの高齢化とかせつかく入ってもらっても長続きしない人が多いとか、同じような悩みを持つている岡さんが多いと、同じような悩んでいる岡さんが関係されている「白根学園」という福祉施設が今年創立50周年を迎え、その記念行事として来る8月27～29日の三日間、ダイアモンド地下街で知的障碍の人達が製作した物品の販売会を催す事になりました。その中で、岡さんが「うか」の為に描きためた絵に少し手を加えて絵葉書を製作して出品されるそうです。もし時間の都合がつけば、行ってご覧になったらいかがでしょうか。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は 8月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。